

御堂ヶ池1号墳発掘調査概報

昭和57年度

京都市文化観光局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市域には、平安京跡をはじめ、過去数千年に至る間の各時代の遺跡が各所に存在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の総面積は、およそ5,000ヘクタールにも及んでいます。

古都といわれてきた京都も現代都市へと変容しつつあり、市内のいたるところで、かつての木造家屋群は、ビルへと変わり続けています。また、土木工事等による発掘件数が年とともに増加の傾向を示しているということは、一方では新たな事実の解明が進むことではありますが、また一方では、それに伴って遺跡が消滅するということにもなります。

このような状況の中で、本市といたしましても、市民や工事関係者の方々などの格別の御協力をいただきながら、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、直接保存し難い遺跡については、その状態をできる限り後世に伝えられるように努めてまいりました。

この発掘調査概報は、昭和57年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたもので、これが今後ながく活用されるよう念願しています。

おわりに、調査に当たって御協力、御援助をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさま方に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う昭和57年度の御堂ヶ池^{おんどうがいけ}1号墳発掘調査概要報告である。
- 2 調査箇所は、以下のとおりである。
名称 御堂ヶ池^{おんどうがいけ}1号墳 住所 京都市右京区梅ヶ畑向ノ地町
- 3 発掘調査は、京都市埋蔵文化財調査センター梶川敏夫・北田栄造、財団法人京都市埋蔵文化財研究所丸川義広が担当し、伊藤 潔・山下俊弘・明輝建設の方々の参加があった。
- 4 本書の作成は、北田と丸川が共同で行なった。写真は大部分を牛嶋 茂が撮影した。顕微鏡写真は岡田文男が撮影した。
- 5 本書で使用した方位は磁北を示す。標高は京都市建設局水準点No252-04-1 (T.P. 87.156m)を使用した。
- 6 本書で使用した位置図は、京都市発行の1/2500の都市計画基本図(鳴滝・宇多野)を調整使用したものである。
- 7 石室使用の石材については、京都府立山城歴史資料館橋本清一氏に、また石棺石材については、奈良国立文化財研究所秋山隆保氏に御教示を得た。記して感謝の意を表します。

目 次

<p>I 調査の経過……………1</p> <p> 1 調査に至る経緯……………1</p> <p> 2 調査経過……………1</p> <p> 3 調査地の位置と環境……………2</p> <p>II 古墳の調査……………5</p> <p> 1 墳丘及び封土……………5</p> <p> 2 内部構造……………8</p>	<p>III 出土遺物……………10</p> <p> 1 土器類……………10</p> <p> 2 馬具・鉄器類……………12</p> <p> 3 石棺……………16</p> <p> 4 陶棺……………17</p> <p>IV まとめ……………18</p> <p> 1 横穴式石室について……………18</p> <p> 2 出土遺物と年代……………21</p> <p>付記……………24</p>
--	---

図 版 目 次

図版 1	遺跡	1	調査前の全景（南東から）
		2	調査前の羨道部（東から）
		3	調査前の玄室部（北西から）
図版 2	遺跡	1	全景（南東から）
		2	玄室奥壁（南西から）
図版 3	遺跡	1	袖石及び羨道部（北西から）
		2	東袖石部分（西から）
		3	西袖石部分（北から）
図版 4	遺跡	1	玄室部（南東から）
		2	東袖石部分の遺物（西から）
図版 5	遺物		土器類
図版 6	遺物		土器類
図版 7	遺物	1	馬具類
		2	鉄器類
図版 8	遺物	1	陶棺の棺蓋
		2	陶棺の棺身
		3	陶棺の底部と脚部

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	3
第2図	調査地位置図(『嵯峨野の古墳時代』による)	4
第3図	墳丘測量図	5
第4図	墳丘断面図(背後に石室を投影した)	7
第5図	石室実測図	8-9
第6図	土器実測図	11
第7図	馬具実測図	13
第8図	鉄器実測図	14
第9図	石棺実測図	15
第10図	石棺拓影・実測図	16
第11図	石室平面割付図(1目盛35.6cm)	19
第12図	石材分類図(数字はトン数を示す)	20
第13図	山城地方北部の石棺・陶棺出土地分布図	22

写 真 目 次

写真1	石材の吊り出し風景(北西から)	1
写真2	調査風景(南から)	2
写真3	石材の吊り出し風景(南東から)	2
写真4	石棺材の顕微鏡写真 ニコル(×10)	17

I 調査の経過

1 調査に至る経緯

昭和38年から39年にかけて行われた御堂ヶ池西側一帯の開発は、池に面した南側斜面に点在する古墳のほとんどを破壊したが、その際、考古学関係者や市民の粘り強い保存運動により、1号墳だけは保が確約され、傍に残存良好な13号墳石室も移築された。

昭和57年夏に、土地所有者が私的事情により当該土地の公有化を要望したが、国レベルでの指定及び買収は困難であると判断され、また府・市による指定の協議もはかどらず、公有化に関しては暗礁に乗り上げたかたちとなった。翌昭和58年1月には土地所有者権が業者へ移り、文化財保護法の届出なしに造成工事を着工してしまった。

地元住民からの通報で工事着工が判明し、即刻工事を中止させて、緊急に発掘調査を実施することになった。しかし、調査に入った時点では墳丘上部の大半が削り取られ、天井石も玄室へ転落したり、ずらされたりしていた。更に、移築されていた13号墳石室は完全に破壊され、1号墳の羨道部へ積み上げられている状態であった。

2 調査経過

調査の経過を、以下、日誌抄として掲げておく。

日誌抄

- 2月3日(木) 現地にて打ち合せを行う。明日より作業に入ることにする。
- 2月4日(金) 重機を用いて攪乱された墳丘封土を排除する。
- 2月5日(土) レッカー車を用いて転落した石材を排除する。
- 2月6日(日)～2月10日(木) 石室内の流入土の掘り下げ。石室実測。墳丘測量等を併行して行う。
- 2月11日(金) 石室内にて床面の精査。玄室より土器・鉄器・陶棺が多数出土し記録をとる。
- 2月12日(土)・13日(日) 玄室内で遺物を取り上げた後、さらに掘り下げる。下層で鉄器が出土し記録をとる。
- 2月14日(月) 全景写真を撮る。



写真1 石材の吊り出し風景(北西から)

- 2月15日(水) 墳丘の断割り開始。時間的制約のため西側では重機を用いた。
- 2月16日(木) 墳丘の断割りと土層図作成。石材の番号登録。
- 2月17日(金) 重機を用い、墳丘の断割りと封土の排除を行う。
- 2月18日(土) 封土の排除。石室実測図に裏ごめ部分を記入する。
- 2月19日(日) レッカー車によって石材を吊り上げ、搬出する。
- 2月20日(月) 墳丘の断割りと土層図作成。
- 2月21日(火) レッカー車による石材の吊り上げ、搬出作業。
- 2月22日(水) 残った石材を吊り出して現場での作業を終了した。



写真2 調査風景（南から）



写真3 石材吊り出し風景（南東から）

3 調査地の位置と環境

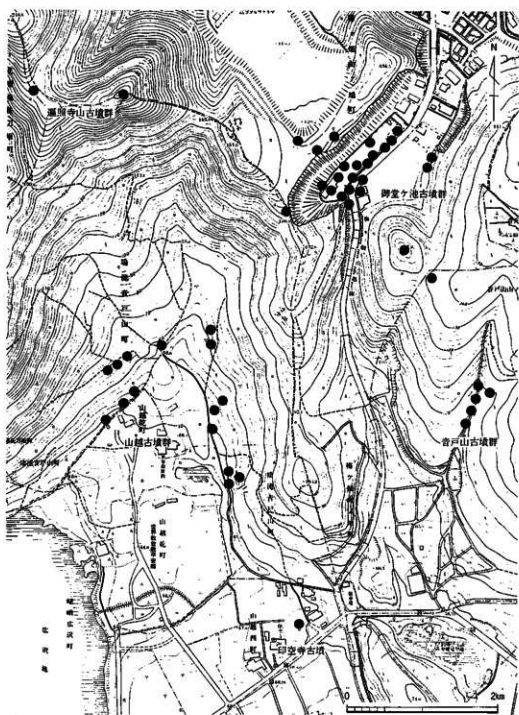
御堂ヶ池古墳群は、嵯峨野広沢池東畔の山越り周山街道に通じる小さな谷にある、通称御堂ヶ池のまわりに分布する23基からなる古墳群である。

朝原山一帯の古生層よりなる丘陵や谷間には、数基づつまとまったいわゆる群集墳が多数点在しているが、御堂ヶ池古墳群は標高100m以上の高所に位置し、小さな谷間に多数の円墳が密集すること等から、朝原山一帯に点在する古墳群の中でも特徴的な存在となっている。

嵯峨野における古墳の在り方は、その立地等からみて大きく三つのグループに分けられることが早くから知られている。

まず、御室川扇状地上に5世紀後半から築かれる6基の前方後円墳のグループがあり、次に、このグループ後方の台地上には6世紀中頃から築造が始まる、径20～50mのやや大型の円墳群が点在している。さらに、その後方の丘陵には6世紀の後半から築造の始まる小円墳を中心とした群集墳のグループがある。

これらの古墳群は、その出現においては前後するものの、三つのグループ共に7世紀前



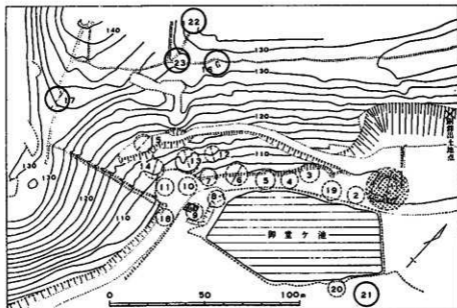
第1図 調査地周辺図

半まで築造されており、互いに基域を異にしながらも、ある時期にはそれぞれのグループが同時期に築かれるという特色を示している。

御堂ヶ池古墳群は、これらの中で丘陵上に位置する群集墳のグループに入るが、その立地からみて、池の西側屋根上に立地する4基と、その下の斜面に立地する17基、そして池の東側斜面に立地する2基の3群に分けることが可能である。今回発掘調査を行なった1号墳は、御堂ヶ池西側の斜面の北端にその位置を占めている。

御堂ヶ池古墳群では、他の古墳は直径10m前後の小円墳であるが、この1号墳だけは直径が約30mあり、石室の平面形や使用石材の大きさ等も他に比べかなり大規模なものである。この墳丘規模や石室プランは、丘陵上の群集墳よりはむしろ、孤塚古墳等の台地上に築かれた古墳群に類似しており、これらのことから、この1号墳の位置付けを、平地部に築かれた古墳群から分離して、丘陵上に古墳を築き始める契機的なものとして考えることができる。

これら多数の古墳群が点在する嵯峨野一帯の環境破壊は年々進行しており、徐々にその景観を変えようとしている。大沢池から広沢池に至る一帯は、歴史的風土特別保存地区に指定されており、比較的豊かな自然景観と共に古墳等もよく原形を保っているが、その周囲では、破壊されようとする遺跡も多く、早急な保存対策が望まれるところである。

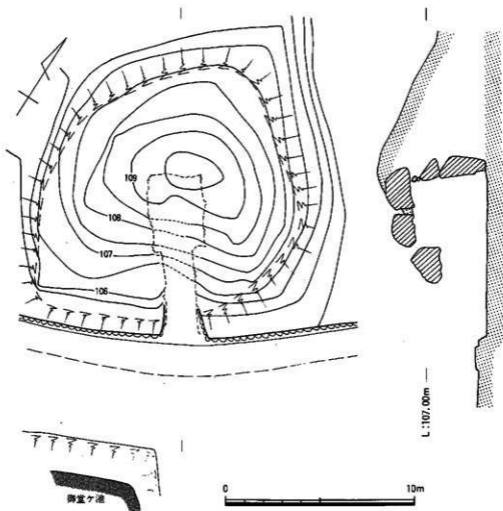


第2図 調査地位位置図 (『嵯峨野の古墳時代』による) ○ 現存する古墳
○ 消滅及び埋没古墳

II 古墳の調査

1 墳丘及び封土

1号墳の墳丘は、昭和38・39年当時の道路敷設工事と、今回の造成工事によって重機が入れられており、その大半が破壊されていた。今回、現状での墳丘測量を実施したが、本来の墳丘を示す図は得られなかった。第3図の測量図は、昭和39年当時に作成されたものを、京都府文化財保護課から提供していただいたもので、それに今回調査の石室平面図を加えたものである。昭和39年当時も、すでに古墳周囲は土取りされており、墳丘規模は明



第3図 墳丘測量図

らかでないが、もともとは隣接する2号墳との関係や、墳域を画していると思われる山側の浅い切り込み等から、直径約30m、墳丘高5m以上はあったものと考えられる。

今回の調査では、墳丘の構築状態を調べるために、石室の主軸方向及び直交方向に断割りトレンチを設定した。しかし、掘削に関しては時間的制約もあり、東側のトレンチを除いては重機掘削にたよらざるをえなかった。

直交トレンチでは、攪乱層(1・2)、墳丘の封土(3～5)、石室の掘形及び埋土(6・7)、地山層(8～10)等の層序関係が明らかとなった。まず、墳丘最上部には、最近の造成工事による攪乱層(1)が認められたが、東側では昭和38・39年当時の攪乱層(2)を検出した。

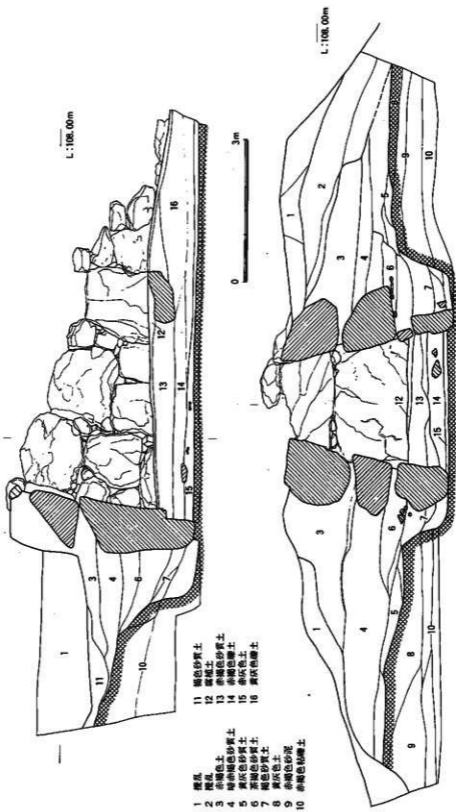
墳丘を構成する封土は3層に大別できた。封土1(3)は礫を含んだ赤褐色土層で、さほどかたくしまっていない。封土2(4)はややかたい暗赤褐色砂質土層で、玄室側壁の2段目石材を置いた後、背後に盛られている。西側では封土1との間に炭層が認められた。封土3(5)は黄灰色砂質土層で、あまりしまっていない。

これより下層で、石室構築のための掘形を検出した。掘形の規模は、作図箇所東西幅6.2m、深さ1.0mを測る。掘形幅が広いので、最下段石材の背後にはかなりの余裕がある。また、掘り込みのレベル位置は、最下段石材の頭部レベルにほぼ等しい。掘形埋土は黄灰色粘土のブロックを含んだ褐色砂質土層で、途中にマンガンを含んだ間層がみられたので、これを基に分層した。基本的には最下段石材を据えた後に入れられた埋土2(7)と、

目石材を固定するための埋土1(6)に大別できた。なお、埋土1は封土3の後に入れ2段ているので、墳丘の盛り上げと石室の構築が相前後して営まれてゆく様子がわかる。られ地山層のうち、地山1(8)とした黄灰色土層は、封土に類似したやわらかい砂質土層であったが、黄灰色粘土ブロックを含むことはない。地山2(9)・地山3(10)は堅くしまった礫土層であったが、石室の掘形の成立面は、さらに上部の堆積層(8)より認められたのであった。

主軸方向の断割りトレンチにおいても、同様の堆積状況が知られた。ただし、主軸方向の背後に丘陵を控えるために、地山層の堆積レベルが高い。このため、墳丘は封土1、封土2のみを確認した。石室掘形は奥壁最下段の巨石の背後1.7mより始まり、ゆるやかな傾斜で深さ約1.7mを有す。掘形埋土は、側壁の層序とやや異なり、マンガン間層による大別は認められなかった。

なお、掘り込み肩部のすぐ北側に、幅1.35m、深さ30cmの小規模な落ち込みを検出した。埋土は褐色砂質土層(11)であるが、攪乱の可能性もあり周溝とは断定できなかった。



第4図 墳丘断面図(背後に石室を投影した)

2 内部構造

主体部は巨石を用いた横穴式石室で、南々東方向に開口している。すでに既報告で、石室の規模や構築過程について論じられているが、今回は石室内の堆積層を掘り下げ調査した。結果、土器・馬具・鉄器等の遺物の他に、陶棺・石棺の破片を多数採集することができた。以下、その所見を述べる。

石室内の堆積層 1号墳の石室は、以前から開口していたこともあって、内部には多量の封土が流入していた。これら石室内の堆積層を調べるために、当初は主軸方向と奥壁より2m・4m・6mの位置に直交セクションを設けたが、掘り下げの過程で時間的ゆとりがないことや狭い石室内での安全性を考慮したため、主軸方向については十分な記録をとることができなかった。

石室内の堆積層は大別して4層あり、全体で厚さ80~90cmを有する。最上層はかたくしまった腐植土層(12)で、炭や焼土を含むことから、開口状態の石室内で焚火等の行為があったものと思われる。

第2層は赤褐色砂質土層(13)で、厚さは約45cm程あり、多量の転落石を含んでいた。

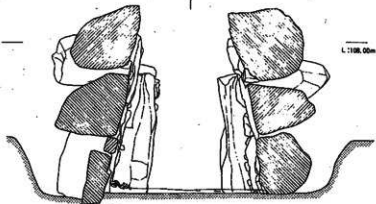
第3層は赤褐色礫土層(14)で、厚さ約25cm程ある。転落した石材とともに、石棺・陶棺・土器が含まれていた。この層までが中・近世の攪乱をうけた層であった。

第4層は当古墳の副葬品を包含した赤灰色土層(15)で、厚さ約20cm程である。直上に炭層があり、一様に玄室内に広がっていたので、第3層との識別は容易であった。第4層からは陶棺・土器とともに、鉄器や馬具が出土したが、出土状態は攪乱されたものであった。

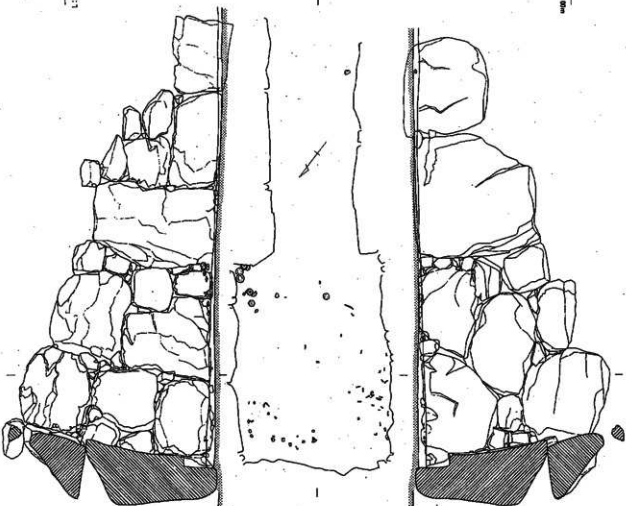
遺物出土状態 玄室内では第4層を中心に、土器・鉄器・馬具・陶棺等が出土した。まず、玄室の中央部付近には陶棺の破片が集中してみられた。これらの北側からは、主に馬具が出土した。また、西壁に沿っては鉄釘がまとまって出土した。しかし、これらの出土遺物はいずれも原位置を失っており、鉄釘についても木棺の規模を復原することはできなかった。

東袖石と側壁とのコーナーには、須恵器・土師器の集中する箇所があった。内分けは、須恵器杯3個、蓋2個、高杯脚部1個、土師器杯2個、高杯1個であった。須恵器杯と土師器杯は、各々口を上に向けて2枚づつ重ねられていたが、須恵器の高杯は同一個体の破片が玄室内の各所から出土している。

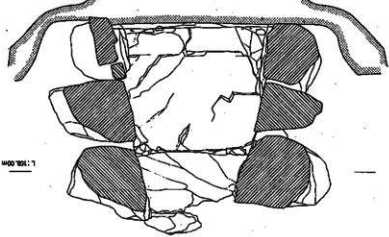
羨道部では須恵器杯1個が原位置らしき状態で出土した他は、上層の黄灰色礫土層中より、陶棺・須恵器・土師器が出土している。



1:2000 GDM



1:1000 GDM



1:1000 GDM

圖 1 遺址平面圖

横穴式石室 当古墳の主体部の横穴式石室については、すでに報告がある。しかし、今回は石室内を地山面まで掘り下げたので、従来に二・三の新知見が加わった。

まず、石室の規模に関しては、既報告に比べやや異なる数値となった。石室の全長は、8.3m以上を有す。玄室は長さ比べ幅の広いプランを示し、玄室長は東で3.65m、西で4.0mを測る。玄室幅は両端で2.7m、中央部で2.85mを測る。玄室高は約3.7mである。

羨道部は長さ4.55m以上を有し、幅1.5~1.6m、高さは約2.4mを測る。使用された石材は大半がチャートであるが、二・三別種がある。今回は、これらの石材を分類し、合わせて重量を計測したので後に詳しく述べる。

石材の規模については、奥壁最下段のものが最も巨大で、幅3.5m、高さ2.4mを測り、天井石・東西の袖石がこれに次ぐ。

その積み方は、いずれも平坦面を内に向け、持ち送りをもって積み上げられる。2段目以上が横積み、あるいは小口積みであるのに対し、最下段の、主として奥壁・袖石・羨道部の石材は、面積に対しては極めて薄いものを縦・あるいは横方向に立て、平坦面を強調するように配置している。

奥壁は3段からなる。最下段の石材は特に巨大であるが、墳丘を断割った際の実測によると厚さは約1mにとどまり、広さの割に薄いことがわかった。最下段、2段目とも表面は平坦面をもつが、岩目に沿う割れが著しく、吊り上げ時に破損する箇所も生じた。

西壁では袖石の巨大さが目立つ。しかし、この石材も幅2.3m、高さ2.2mを有するものの、厚さはわずか86cmにとどまった。玄室部は本来4段積みであったらしい。最下段には巨石を2個用いるが、袖石との間に隙間があり、これを小石4個を縦に詰め込んで埋めている。こののち、巨石を用い2段目を積み上げ、小石で隙間を調整した後、3段目を積む。羨道部は石材が1個のみ遺存していた。この石材も広さの割に厚さのないものであった。

東壁でも袖石が最も巨大で、高さ2.3m、幅1.4mの巨石を立てて据え、玄室と羨道を厳然と区別している。玄室部は本来4段積みであったろうが、西壁程明瞭ではない。最下段の石材は横・縦積みの巨石を2個用いる。ここでも袖石との間に隙間が生じており、ここに立石を入れて調整している。奥壁寄りでは2段積み上げた時点で、袖石寄りのL字形の隙間にも方形の石を埋める。この結果、袖石方向が下り気味になりながら、巨石を用いて3段目を構築する。4段目は西壁と同じく比較的小さな石材を用いる。羨道部では、最下段に厚さのあまりない同規模の石材を2個据え、この上に玄室部に比べると小規模な石材を横積みしている。

Ⅲ 出土遺物

玄室内の第3層(赤褐色礫土層)、第4層(赤灰色土層)を中心に、整理箱17箱分の遺物が出土した。内分けは、須恵器・土師器等の土器類、馬具・鉄器等の金属製品と、主体部に割棄されたとみられる土師質陶棺、凝灰岩製石棺の破片多数である。また、上層の攪乱層からは、平安～室町時代の土師器・黒色土器・瓦器・銭貨等も出土している。

1 土器類(第6図、図版5・6)

須恵器杯(1・2・6～10)・蓋(3～5・11)・椀(12)・高杯(16・17)・短頸壺(13～15)・脚付壺(18)・高台付壺(19)、土師器杯(20～23)・高杯(24)・長頸壺(25)がある。このうち、杯2が墳丘南斜面で、杯8・短頸壺13～15・高台付壺19・長頸壺25が茨道部から出土している。東袖石部より一括出土したものは、須恵器杯7・9・10、蓋4・5、高杯17、土師器杯22・23、高杯24である。

須恵器

杯(1・2・6～10) 1・2は他の杯よりも口径がやや大きく14cmを測る。たちあがりは内傾し、底部は浅く、粗いヘラケズリをしている。6～9は底部を全体に丸く仕上げしており、たちあがりは非常に低い。杯10の底部は回転ヘラ切りのまま未調整である。

蓋(3～5・11) 3～5は天井部と口縁部との境界は不明瞭で、全体に杯と同様丸味をもって仕上げている。セットと考えられる蓋4と杯7は、他に比べて胎土は精良であるが、焼成はあまり良くない。11は天井部を粗くヘラケズリし、中央には乳首状のつまみがつくものである。

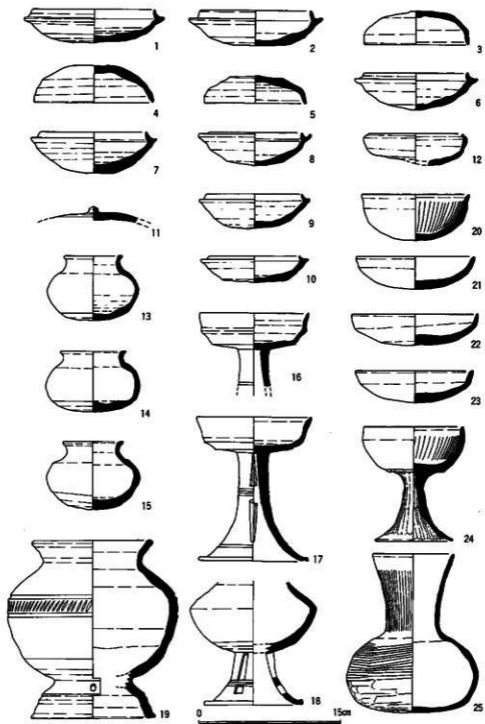
椀(12) 内湾する口縁部を有し、底部はヘラケズリしている。

高杯(16・17) 裾部の大きく広がる長脚の無蓋高杯で、17には2方向の2段透しがある。16には透し孔は認められない。

短頸壺(13～15) 小型のもので最大径は体部中央にある。口縁部は端部を外方へつまみ出し、平らな面をもっている。底部はヘラケズリによって丸く仕上げている。

脚付壺(18) 肩部は稜をもって屈曲し、胴底部につづく。脚部は3方向の2段透しをもつ。下段の透し孔は方形を呈する。

高台付壺(19) 肩部付近に最大径をもち、二条の凹縁の間に列点文を施している。高台部は短かく安定感があり、貼り付け部付近には円孔を穿っている。



第6图 土器夹测图

土師器

杯(20~23) 20は内面に放射状暗文をもつもので、口径11.5cm、器高4.9cmを測る。口縁端部をわずかに外反させ、体部は半球形を呈している。21~23は内面と口縁部外面をナテ調整し、底部外面は未調整のままである。

高杯(24) 半球状の杯部をもち、口縁部はわずかに内湾する。杯底部に段をもち、指でおさえて調整する。脚部は裾でやや広がり、内面にはシボリ目が残る。

長頸壺(25) 横長の体部をもち、底部はヘラケズリによって平らに仕上げている。頸部は外方へのび、そのまま口縁部につづく。精良な胎土を用い、頸部と体部上半の外面には暗文が施されている。

2 馬具・鉄器類(第7・8図、図版7)

玄室内の第4層を中心として出土した。内分けは、馬具では鞍(4個)・銚具(6個)・飾金具(16個)・鉄(6個)・輪轆(破片数個)、鉄器では、刀子(3個)・鉄鎌(3個)・鉄釘(約30本)等である。

馬具 玄室北東部の東壁に沿う場所から出土している。

銚 銚にはA・B・Cの3種がある。

銚A(1・2)は半球状の金具の両端をやや尖らしたもので、鋼を媒介とした鉄地金鋼製品である。固定方法や使用位置は不明であるが、一応この種に含めておく。

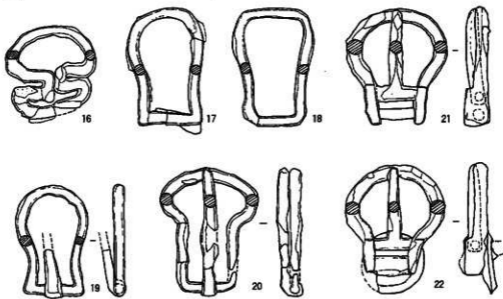
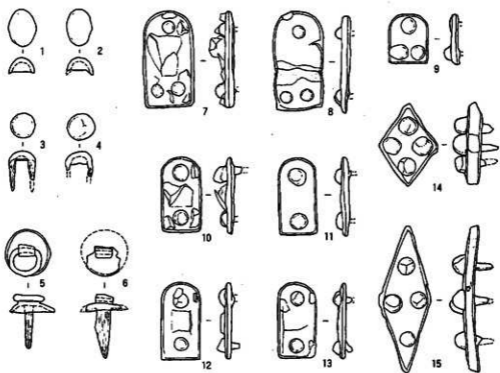
銚B(3・4)は径1.4cmの半球状の両端をのぼし脚としたもので、ここにタテ方向の木質が残る。3は長さ2.1cmを測る。

銚C(5・6)は径2.6cmの座金具をもつもので、長さ3cm前後を有する。座金具の上部には径2cmの輪管をとりつけ、これを引き手として紐をとしたものである。脚には銚B同様のタテ方向の木質がみられる。

飾金具には、一端が円い長方形の金鋼貼りの鉄板に、2個ないし3個の銚を打ち込むもの(A)と、菱形の鉄板に4個の銚を打つもの(B)の2種がある。また、Aは銚の数や配置から、銚が1:1に配されるものA₁と1:2に配されるもので大型のA₂、小型のA₃に分類できる。

飾金具A₁(10~13) 長さ5.1cm、幅2.0cmで規格化されており、表面に金メッキが施されている。5個出土している。

飾金具A₂(7~8) 長さ5.1cm、幅2.6cmを測り、3個出土している。表面に金メッキが



第7图 马具实例图

施されている。

飾金具A₉(9) 長さ2.6cm、幅2.0cmを測るが、中には長さ3.8cmのものもある。金メッキされるものは、長さ3.8cmに達するもののみである。

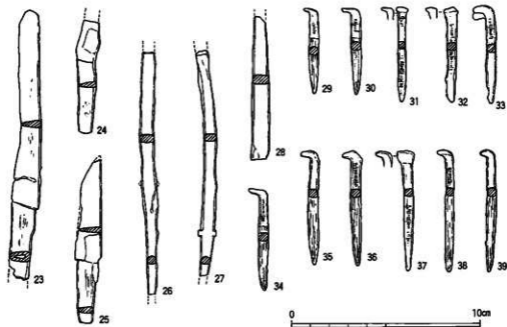
飾金具B類では長さ4.3cmのもの(4)と長さ5.6cmに達するもの(15)の2個が出土している。いずれも同じ作りを示し、金メッキは認められない。

鉸具(17~20) 尾錠が直接基部に巻き込むもので、径6mm程の円棒を□形に打ちまげている。17・18は尾錠を欠失している。16は8の字状の輪金である。

鞍には、尾錠をもつもの(21・22)と○形を呈し尾錠をもたぬもの(23)の両方がある。21・22は同形・同大で、径7mmの円棒を輪金とし、1.2cm×0.4cmの断面長方形の基部に2本の横棒を差し込んでいる。22には径2.4cmの金メッキを施した座金具がとりつき、脚部の一部が遺存しているが、21は欠損してみられない。

鉄器

刀子(23~25) 刃部が10cmに及ぶ大型のもの(23)と、5cm程度の小型のもの(24・25)がある。25のみ完形である。いずれも刃部、柄部にタテ方向の木質をとどめる。



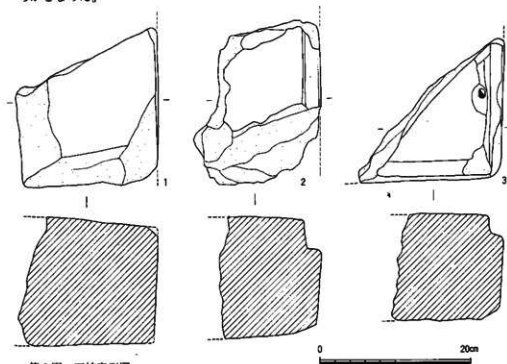
第8図 鉄器実測図

鉄釘(26・27) 柄部から鐵身部にかけての破片で、完形品はない。現存長で約12cmを測る。鐵身部は幅7mm、厚さ4mmの断面長方形を呈すが、柄部は径5mmの円棒である。両者の境には2mm程の小突起がある。28は長さ7.6cm以上の細長い鉄板である。

木棺に使用されたと考えられる鉄釘(29~39)は、玄室の北西部からまとまって出土した。断面5mm程の角棒の一端を折り頭部とし、一端を尖らしたもので、長さは4.5cmから6.4cmまでのものがみられる。

大部分の鉄釘には木質が残っており、木目方向には3種ある。即ち、A：頭部がヨコ、先端部がタテ方向、B：頭部及び先端部がともにヨコ方向、C：ともにヨコ方向ながら、それが直交するものの3種であるが、図示した鉄釘の内分けは、Aが29・30・34・35・36・38・39、Bが31・32、Cが33・37となっている。本来はAが側板と小口板とを、Bが底板と側板とを、Cが底板と小口板とを固定したものであろうが、出土位置からは木棺の規模や構造を復原することはできなかった。

また、木目の方向差によって棺材の厚さが推測できるが、これによると本例では厚さ1.5cm~2.0cmの値を得ることができ、木棺材としては極めて薄い板材が用いられたことが明らかとなった。



第9図 石棺実測図

3 石棺(第9・10図、図版9、写真4)

組合式家形石棺と考えられる流紋岩質凝灰岩の破片が、石室内の床面・攪乱層をとわず多量に出土した。いずれも石棺材としては小片であるため、使用位置が推定できず、ここでは底の状態で図示し報告しておく。

1は長さ20.5cm、幅18.9cm、厚さ17cmを有し、最も厚味のある破片である。上・下面と側面の3面を成形し、各々の境は面取りなく直角に折れまがる。

2は長さ21.2cm、幅17cm、厚さ16cmを有す。上面端部に、幅1.5cm、深さ4cmの段を形成し、他と組み合うようになっている。側面と下面の境にも幅3cmの面取りが施されている。

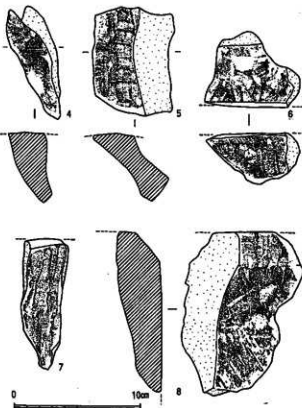
3は長さ18.5cm、幅19.5cm、厚さ14cmを有するコーナー部分の破片としては唯一のものである。上面の一方には、幅1.5cm、深さ2cmの段を設けるが、もう一方は面取りを施すのみで段は設けられてはいない。下面の端部は、2と同様の面取りがなされる。

これらの石棺材の表面は、いずれもノミ等の工具によって丁寧に加工されており、表面

は極めて平坦な面をもっている。特に、後に述べるBとした石材の表面については、ノミ状工具による加工痕跡がよく観察されたので、今回はこれを右図として掲げた。

肉眼観察では石棺の材質をおよそ2種類に分類できる。Aは、岩石の中に長石類の鉱物を含むほか流紋岩を含んでいる。BはAと比較するとずっときめが細かく、流紋岩を含むほか鉱物としては有色鉱物を確認できるだけである。出土量ではAがはるかに多い。

両者の薄片を作成し、偏光顕微鏡下で鉱物を確認した結果、Aは曹長石・バミスを多く含み、石英・花崗岩類を若干含んでいる。鉱物の大きさは均一で、約2mm前後である。一



第10図 石棺拓影・実測図

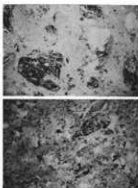


写真4 石棺材の顕微鏡
写真 | ニコル(×10)

方Bは、石英・バミスを多く含み、長石類は少ない。有色鉱物は風化が進んでおり、判定が困難であるが形態から黒ウンモであろうと推測する。その他にガラス・花崗岩片を含んでいる。鉱物の大きさは均一で、約0.2mm前後である。以上の結果から、石棺の材質はともに流紋岩質凝灰岩である。特にAは、従来から竜山石と呼ばれる岩石によく似ており、兵庫県宝塚市宝殿(竜山)付近の産であると考えられる。Bは、前者と比較するとはるかにきめこまかいが組成は前者に似ている面もあり、現在のところ、比較試料と検討した結果では、兵庫県加西市高室の付近で採取した標本に最も良く似ているとの印象を受けている。

4 陶棺(図版8・9)

玄室内第3・4層を中心に土師質亀甲形陶棺の破片が多数出土した。攪乱状態で出土し、小片が多いため、陶棺の全容は復原できない。ここでは破片観察の結果を報告する。

全体 正確な規模は不明である。推定で全長2m、高さ90cm前後と思われる。

棺蓋・棺身を別作りし、中央で切断し2分する合口式である。

棺蓋端部と脚端部に黒斑が認められるので、棺蓋と棺身を分けて焼成している。

短側面は丸く、ゆるやかなカーブを有する。

棺蓋・棺身・脚部の各外面には丹が塗られている。

胎土は砂粒を多く含む。色調は灰白色～明黄褐色を呈する。

棺蓋 粘土板成形で、厚さ約1.5cmを有する。

突帯は幅2cm、高さ1cmで、端部のものを含めるとヨコ方向には3段めぐる。

突帯の間隔にはばらつきがあり、ヨコ方向間は19cm前後と25.5cmの2種ある。タテ方向間は20cmの間隔を有す。

中段の突帯の交差点付近に、一辺4cm程の方形孔が穿たれている。

側面部から天井部への移行は、突帯を境に屈曲して至る。

端部の下面には、成形時に付着したらしい木葉痕が明瞭に残っている。

内外面ともナデ調整である。

棺身 粘土板成形で、厚さ2.3cmを有する。

突帯は幅2.7cm、高さ1.7cmを有し、棺蓋のものより大きい。体部中央と底部付近に2段

にめぐる。

突帯の間隔は、ヨコ方向間は14cm、タテ方向間は16cmを測る。

受部の鈎状の突帯は位置によって突出幅が異なり、長側面で3cm、短側面で7.5cmを測る。外面にはヨコ方向のハケメをとどめる。内面はナデ調整である。なお、突帯はハケを施した後に貼りつけている。

棺底部 粘土板成形で、厚さ2.4cmを測る。

中央切断部では、粘土板の接合がよく観察できる。

内外面ともナデ調整である。

脚部 厚さ0.9cmを有し、2行であったものと思われる。

脚部径は約16cmで、脚高は約15cmである。

外面にはタテ方向のハケメをとどめる。内面はナデ調整で、端部はヨコナデする。

棺底部との接合方法は、脚部を底部に直接押しあて、内外面に粘土を貼り付けて固定している。

IV まとめ

御堂ヶ池1号墳は、山中の狭隘な谷間に立地する群集墳中にありながら、嵯峨野の平野部に展開する大型円墳に対比される規模と内容をもつ古墳として注目されてきた。

今回、造成工事によって消滅することになり、やむなく緊急調査を実施する運びとなったが、調査の結果得られた成果は、本古墳のもつ重要性をさらに高める内容を多分に含んでおり、嵯峨野地域における本古墳の位置付けにも若干の手直しが必要な段階に至っている。以下、これらを記してまとめとしたい。

1 横穴式石室について

今回調査した1号墳を含む御堂ヶ池古墳群は、北西から南東にのびる朝原山山中のうち山越から周山に抜ける小さな谷間の斜面に立地している。現状では南面の山陵にはばまれ平野部の見通しはきかないが、丘陵上に立地する17号墳等に立てば、嵯峨野地方を望遠することができる。このように、狭隘な谷間に立地する1号墳ではあるが、主体部の横穴式石室は巨石を用いており、その規模は衣笠山1号墳や狐塚古墳(大覚寺4号墳)に類似することから、平野部の大型円墳にみられる巨石石室墳との関係で注視されてきた。今回、石室内の調査を実施し、石室のより正確な寸法が得られたが、それは埋土層を排除したこ

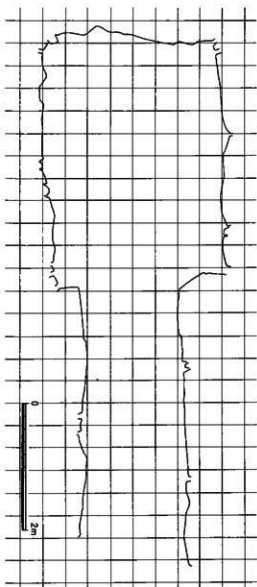
とにより平面形が広がる結果となった。

さて、古墳時代、ここに横穴式石室の設計には高麗尺の使用が予想されている。そこで、今回の調査で明らかになった石室平面図に、1目盛35.6cmの方眼を重ね合せれば、右図のようになる。確かに、玄室幅は8尺、羨道幅4尺、玄室長10尺(11尺)で比較的良好な完数が得られた。ただし、使用石材には当初からかなり凹凸がみられ、しかも端部の丸いものについては計測位置でかなり仕上り図面が変化する。また巨石を据えるにしても基準線通りに据え付ける作業は容易ではなかったものと思われ、±10cm前後の誤差は容認されなければならないと考える。この程度の誤差を勘案すれば、右図のとおり本古墳にもこうした尺度が採用された可能性は十分に考えられるのであるが、こうした作業の検討については、石室平面形においては可能としても、側壁材によって高さの決定される天井石をもつ石室立面形については極めてむづかしいと思われる。

石室の平面形を考える上で参考になるのは袖石の占める位置である。本古墳でも東西の袖石は極めて巨大な石材を用い、羨道との区別は厳然としている。石室の構築過程からみてこれらの袖石を奥壁最下段石に次いで据え

られたものと仮定すれば、玄室長はこの段階で決定されたので、最下段石はこれにみあう寸法のものが用いられたことになる。本古墳の場合は巨石を用いることから最下段には2個の石材を横積みしているが、それでも袖石の間には隙間が生じたので小石や立石によってこれを詰めている。これらのことは袖石の重要性を知る上で興味深い事実である。

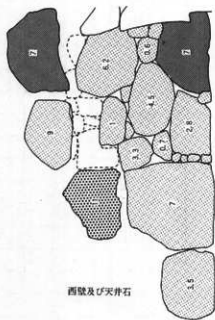
次に、本古墳の石室に使用された石材の種類及び重量について記す。



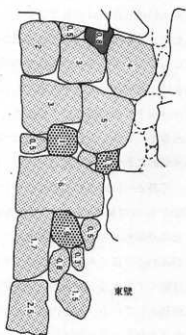
第11図 石室平面割付図(1目盛35.6cm)



奥壁



西壁及び天井石



東壁

第12図 石材分類図（数字はトン数を示す）

石室に使用された石材は大半がチャートで、他に脈石英・緑色岩類・礫岩などがある。おおまかにその比率を求めれば、チャート73%・脈石英15%・緑色岩類10%・礫岩2%となる。

石材の円磨度はほとんどが0.1から0.3に属し、総じて角ばっている。風化度は、中には弱いものもあるが、大半は新鮮なものである。

石材の大部分を占めるチャート・脈石英などは、周辺一帯の丘陵で採集されるものである。また、発見例の少ない緑色岩類なども、部分的に露頭していたものを使用したものと思われる。

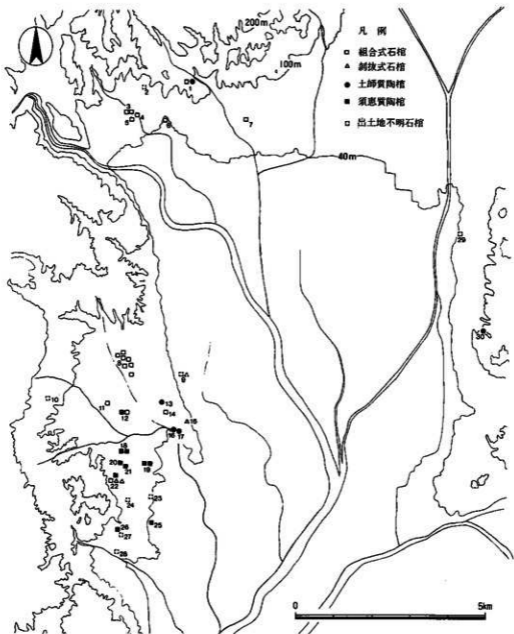
今回は大型レッカー車を用い石材を吊り出したので、個々の石材についてはその重量を知ることができた。その結果、石室使用石材の総重量は約114トンであり、計測できなかった小石材を加えると、全体で115トン前後の重量を有するものと思われる。1トン以上の石材の内分けは、10トン以上が2個、5トン以上10トン未満が7個、1トン以上5トン未満が14個であった。

最も重い石材は、いわゆる鏡石に用いられた奥壁最下段の緑色岩類で、15.5トンを計った。二番目に重い石材は、袖石にあった天井石で、11トンを計った。また、袖石に用いられた石材は、表に現われる面積はかなり広いが、厚みがさほどなく、重量は東側が6トン、西側が7トンであった。

2 出土遺物と年代

今回の調査で出土した遺物の中で、まず出土土器とその年代について述べると、嵯峨野地域における古墳出土須恵器の編年については、すでに『嵯峨野の古墳時代』にその概要が報告されている。本古墳出土の須恵器の杯・壺にはヘラケズリしていないものが多く、ヘラケズリしていても簡略的な粗いものである。杯10にみられる底部切り離し手法は、この付近では播磨古窯址群等で多くみられる製品である。

内面に暗文をもつ土師器の杯20や高杯・長頸壺等は飛鳥地方における土器編年のⅠ期ないしⅡ期に編年されている土師器の手法と共通している。このように、1号墳出土土器の大半は7世紀前半に編年されるものであり、『嵯峨野の古墳時代』による編年のⅣ期、大阪陶器古窯址群編年のTK217型式に属している。これらの中で、杯1・2は立ち上りが他のものよりも高く、ヘラケズリの範囲も比較的広いなどの点から、長脚無蓋高杯なども含めて若干時期が遡るものであり、6世紀末葉に属するものと思われる。



1. 御堂ヶ池1号墳 2. 後宇多 3. 大覚寺1号墳(2個) 4. 大覚寺2号墳 5. 大覚寺3号墳 6. 広沢1号墳
 7. 双ヶ岡1号墳 8. 福西古墳群(8個) 9. 米遊寺(2個) 10. 大原野 11. 大道古墳 12. 石見上屋古墳
 13. 恵美須山 14. 芝山 15. 西垣内古墳 16. 五塚原 17. 大平 18. 芝12号墳(2個) 19. 富山古墳(2個)
 20. 北平尾古墳 21. 北平尾古墳 22. 光明寺古墳 23. 今里墓跡堂 24. 長法寺山の下 25. 川原谷南方
 26. 走田古墳 27. 寂照院 28. 美海印寺 29. 阿古屋墓 30. 本多山古墳

第13図 山城地方北部の石棺・陶棺出土地分布図

次に、本古墳からは組合式家形石棺と考えられる凝灰岩の破片が多数出土しており、当初は石棺が主体部に納められたことが推定できる。嵯峨野地域においては石棺出土古墳がおおよそ7例あり、うち双ヶ岡1号墳や円山古墳(大覚寺1号墳)は墳丘や石室規模からみて首長墓の系譜にある古墳と考えられている。また、大覚寺2・3号墳や広沢古墳についても巨石を用いた石室を有す。調査前、すでに御堂ヶ池1号墳はその石室形態からみて平野部の大型円墳と関係することが論じられていたが、今回の調査で石棺を主体部に納めていたことが明らかになり、両者はさらに接近した関係にあったものと思われる。

1号墳の特色を示す今1つのものは、石室内より出土した多量の陶棺片である。これらは復原すると全長2m余りの亀甲形陶棺となったが、本古墳の周囲には陶棺を出土した古墳の類例がなく、分布状態は極めて稀となっている。山城地方における陶棺の分布状態は桂川右岸、乙訓地方に須恵質陶棺を主に展開しているが、多くは7世紀前半に下るものである。この点、本例はその型式から6世紀末～7世紀初頭の年代が考えられ、分布状態が極めて稀薄な嵯峨野の地に、山城地方では古式の陶棺が納められていた事実は、本古墳の被葬者の性格の一端を示すものとして重要である。

また、本古墳からは鞍や鉸具・金メッキを施した飾金具等の馬具が出土しているが、こうした遺物の内容も山城地方の後期古墳の中では稀少で、本古墳のもつ階層的優位性の表われと評価できる。

以上の点をまとめれば、狭溢な谷間斜面に立地する御堂ヶ池1号墳は、6世紀末葉に築造され、当初は組合式石棺が埋納され、後に土師質陶棺・木棺等によって7世紀前半まで追葬が続けられたことが予想される。

※ 本書の作成には、以下の文献を参考にした。

京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』1971年

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 1978年

田辺昭三『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966年

安藤信策「山城の石棺」『京都考古』15 1975年

和田晴吾「畿内の家形石棺」『史林』59-3 1976年

間壁忠彦他「石棺研究ノート(四)」『倉敷考古館研究集報』第12号 1976年

吉岡博之・木村泰彦「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』

第1集 1979年

〔附 記〕

御堂ヶ池1号墳は、過去にいろいろな経過をもちながらも現在までよく保存されてきた古墳である。その保存に投じられた先学の方々や市民の方々の足跡を消し去るかたちとなった今回の発掘調査は、現在に至ってもなお興味なかたちとしてしか扱われない埋蔵文化財というものの現状を端的に示すものであった。

京都の文化財は、観光資源となる名所や旧跡ばかりではなく、我々の過去の生活を鮮明に再現してくれる埋蔵文化財もまた数多く地下に眠っている。調査を終了した御堂ヶ池1号墳は今後移築される予定になっているが、これらの埋蔵文化財の理解と啓蒙普及のためにこの移築が役立つことを願うものである。

圖 版

— 1 —



1 調査前の全景(南東から)



2 調査前の羨道部(東から)



3 調査前の女室部(北西から)



1 全 景(南東から)



2 玄室奥壁(南西から)



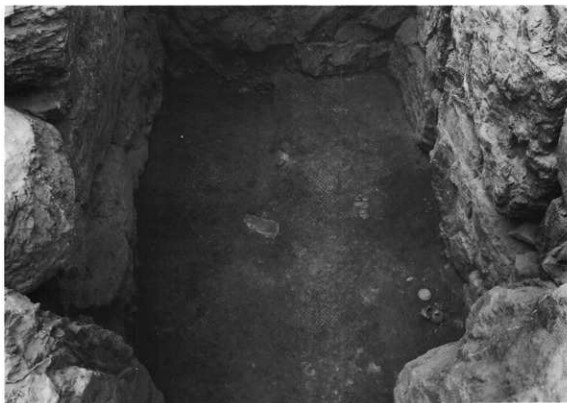
1 袖石及び羨道部(北西から)



2 東袖石部分(西から)



3 西袖石部分(北から)



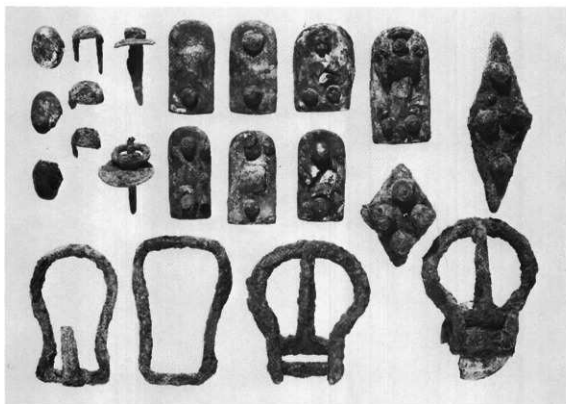
1 玄室部(南東から)



2 東袖石部分の遺物(西から)



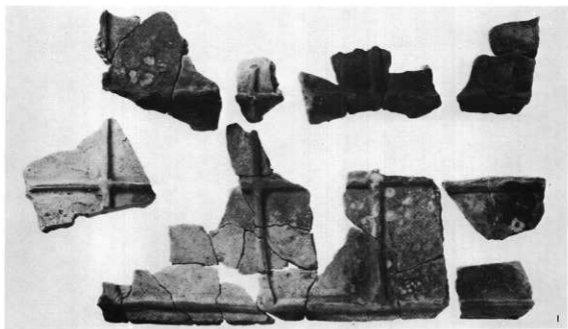




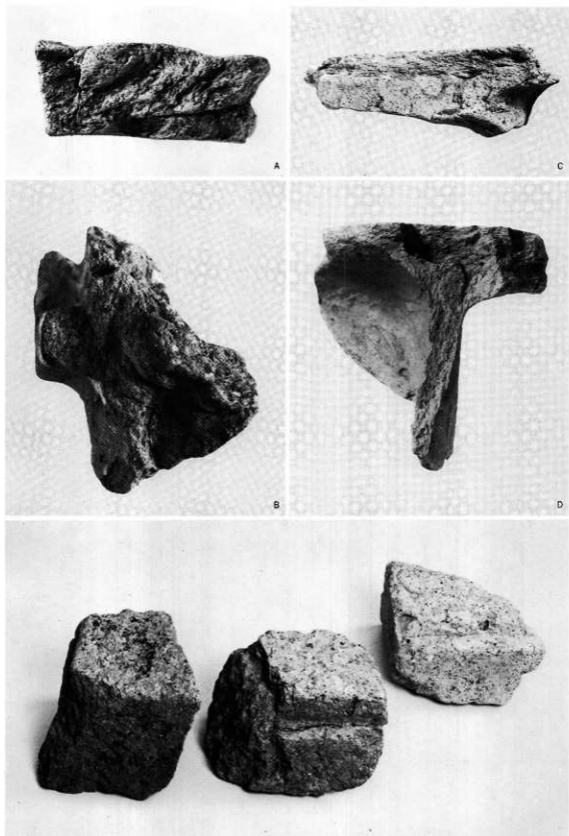
1 馬具類



2 鉄器類



1 陶棺の棺蓋 2 陶棺の棺身 3 陶棺の底部と脚部



陶棺の接合部(A-D)、石棺(下段)

御堂ヶ池1号墳発掘調査概報

昭和57年度

発行日 昭和58年3月31日

発行 京都市文化観光局
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
〒602 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265-1
TEL(075)415-0521

印刷 柳 真 陽 社
〒600 京都市下京区油小路綾小路下ル風早町566
TEL(075)351-6034